読　む

伴大納言絵詞

――〈謎の人物〉をめぐって――

竹村信治

読　む

『伴大納言絵詞』で〈謎の人物〉といえば、巻頭の応天門炎上画面につづく、清涼殿南階前の庭で災を遠望しつつ佇立する束帯姿の人物のこと。またそのすぐ左、清涼殿広廂に座す人物もそれ。両者は同一人物と看做されているがこれが誰であるのかは諸説一致をみず、文字どおり謎となっている。諸説を列挙すれば、

・伴善男説（福井利吉郎『絵巻物概説』一九三三年4月・上野直昭『絵巻物研究』五〇1）

・藤原基経説（田中豊蔵『日本美術の研究』六〇11・小峯和明『説話の森』九一5）

・源信説（この内、簾中で帝と対座する人物を伴善男とする説に桜井清香『大和絵と戦記物語』六九3・藤田経世『伴大納言絵詞』複製解説七一12。同じく藤原良房とする説に小松茂美『伴大納言絵詞』日本絵巻大成2解説七七2）

・藤原良房（源豊宗『大和絵の研究』七六12）

の四説。その一々を詳細に吟味する紙幅は今ないので、問題点の整理をかねて一応の私見を示しておくこととしよう。

まずは良房説。これについては、この場面に対応すべき詞書を「破損」している（『看聞御記』嘉吉元年四月二六日条）『絵詞』の欠を後段の詞書とほぼ一致する本文をもつ『宇治拾遺物語』一一四段で補えば、簾中で帝と対座する人物をこそ藤原良房とすべき点ほぼ動かないから、この人物と装いを異にする〈謎の人物〉を良房とは考えにくい。次に源信説。信が良房の諫言の場に伴われたとすると、そこで嫌疑の晴れた後にあらためて使者が派遣されることになったり天道に哀訴することになったりと、展開上の不自然さが生じる。つまり簾中で帝と対座する人物を藤原良房とするかぎりにおいて、良房説・源信説は受け入れ難い。

藤原基経説。これを唱える二者のうち、田中説は『宇治拾遺物語』話にいう無罪の決定を信に伝える使者「頭中将」を基経と見、これが広廂に控えているとするもの。『三代実録』貞観一〇年閏一二月二八日の源信薨伝には「勅遣参議右大弁大枝朝臣音人・左中弁藤原朝臣家宗等」とある。記録に照らせば「御使」＝基経説は成り立たないが、当時の基経

を「蔵人頭」とするものに『愚管抄』巻三（後掲）がある。説話の人物記載は記録より伝承の方が重要との見方に立てば田中説は聞くに足る。ただし、この説の弱点は〈謎の人物〉が赤の下襲に束帯の姿であること。この装束は上達部のもの（『雅亮装束抄』）だから蔵人頭基経（『公卿補任』は任参議貞観六年正月一六日「元蔵人頭左中将、中将如元」）のものではない。一方、「頭中将」基経説を保留して〈謎の人物〉を基経とする小峯説は、応天門炎上の貞観八年閏三月当時参議左中将で上達部だった基経の、事件の「陰の立役者、演出家」たる立場を絵画化したものとの見解で、これには支障がない。ただ、諸資料の伝える基経は信を陥れる策謀を良房に伝える役回りだから「陰の立役者、演出家」とまでいえるかどうか。広廂に控える姿は諸資料の基経像に叶うが、応天門炎上の景を眺める姿にまで基経を見るのはいかがなものか。

最後に伴大納言善男説。欠損している詞書冒頭が『宇治拾遺物語』話のごときものであるとすれば、これが一番難がない。『宇治拾遺物語』話の冒頭には次のようにある。

今は昔、水尾の御門の御時に、応天門焼けぬ。人のつけたるになむありける。それを、伴善男といふ大納言、「これは信の大臣の仕業なり」と、おほやけに申しければ、その大臣を罪せんとせさせ給ひけるに、忠仁公、世の政は御弟の西三条の右大臣にゆづりて、白河に籠りゐ給へる程にて、この事を聞き驚き給ひて、御烏帽子・直衣ながら、移の馬に乗り給ひて、乗りながら北の陣までおはして、御前に参りて、（諫言部分以下、略）

今かりにこの行文と『絵詞』画面展開とを対照してみよう。「応天門焼けぬ」を承けた画面構成の圧巻は諸家の説くとおり。「人のつけたるになむありける」に対応する画面はないが、これは後段に見える放火現場を舎人が目撃した経緯を語る詞書やこれも圧巻の舎人真相暴露告発場面の効果を計算しての割愛。そして『絵詞』は〈謎の人物〉を描いて忠仁公諫言の場面、すなわち『宇治拾遺物語』の「忠仁公、世の政は御弟の西三条の右大臣にゆづりて、白河に籠りゐ給へる程にて、…」以下に対応する画面に移る。

『絵詞』の全体は、舎人の放火現場目撃の部分を除き、画面展開がほぼ詞書に対応している。それぞれの場面が詞書を拡大増幅するかたちで絵画化されていることは彼此を比較すれば明らかで、その『絵詞』のありようを念頭においてこの冒頭部分を見れば、これもまた詞書（『宇治拾遺物語』話冒頭）との対応を保って展開していることが確かめられる。とすれば、問題の〈謎の人物〉の場面は傍線部の絵画化。つまり伴大納言の策謀と讒言を描いたものということになる。その眼で見ると、簾内の髻もあらわな清和帝に対座するこれもうちとけた烏帽子・直衣姿の良房と、簾外で首を傾けた束帯姿の善男との配置は、時を異にする奏上の二場面、そして内と外また装いの対照に、奏上の受容／拒否、帝との距離感、あるいは権力の共有／隔絶またはそこからの排除といったことを表示したものと読むこともできる。すなわち、失われた『絵詞』冒頭部の詞書を『宇治拾遺物語』話冒頭によって補い、これにしたがって絵を読むかぎりにおいて、「卑俗にすぎる」（小峯前掲書）といわれれば返す言葉もないが、〈謎の人物〉は善男を措いてほかに考えにくい。

*

ところで、今〈謎の人物〉善男説の蓋然性を『宇治拾遺物語』話冒頭によって絵を読むかぎりとの限定付きで認めたが、限定を付

けたのは『絵詞』詞書の表現を『宇治拾遺物語』話のそれと同じと看做してよいかどうかに疑問があるからである。確かに現存詞書と『宇治拾遺物語』話とはほぼ同文といってよい叙述の対応を見せている。そこからすれば冒頭部もこれに準じて考えてよいように思われるが、現存詞書に『宇治拾遺物語』話と異なる部分がないわけではない。そのうちの最も大きな違いに、信に無罪を伝える人物を特定して示すか否かの相違がある。

ゆるし給ふ御使に、頭中将、馬に乗りながらはせまうでければ（『宇治拾遺物語』）

赦し給ふ由、馬に乗りながらうち入りたれば（『絵詞』詞書）

『宇治拾遺物語』話は「頭中将」と記すが、詞書はこれを欠く。この職名が記録通りの勅使を指すものであれば記載の有無はそれほど問題にはならない。しかしすでに見たとおりこの折の使者は「頭中将」ではない。また事件当時の蔵人頭は藤原良世と藤原家宗だがともに中将の職にはなく、したがって事件にかかわった「頭中将」は実際にはいなかったことになる。とすればあえて「頭中将」と記す『宇治拾遺物語』話はこれに相応の表現を託したものと看做される。

関連諸資料中に「頭中将」を求めると、「コレラハ人皆知リタレバ細カニハ記サズ」として事件を語る『愚管抄』に「蔵人頭」が見出される。

コノ御時、伴大納言善男、応天門焼キテ信ノ大臣ニ仰テ、既ニ流サレントシケル事、ソノ間ニハ良相ト申ス右大臣ハ良房ノ弟ニテ、入リ籠ラレテ後天下ノ政、良相ニウチ任セテアリケルニ、天皇伴大納言ガ申コトヲ実トオボシメシテ、カウ〳〵ト仰セラレケルヲ、疑ヒ思ハデ、ユヽシキ失錯セラレタリケリ。ソレヲバ昭宣公蔵人頭ニテ聞キ驚キテ、白川殿ヘハセ参リ告ゲ申テコソ、善男ガコトハアラハレニケレ。（適宜仮名を漢字に改めた）

先に記したとおりこの時基経は蔵人頭ではないが、「人皆知リ」たる物語では基経が蔵人頭だったという。『愚管抄』では以下が省略されているので確かめようがないけれども、史実に背いて「蔵人頭」基経を語る「人皆知リ」たる物語は、記録とたがえて「頭中将」を使者とする『宇治拾遺物語』話との関連を思わせる。

『愚管抄』話が基経を蔵人頭とするのには理由がある。それは『大鏡』裏書に引く次の記事と比べればよくわかる。

後応天門有レ火。良相右大臣伴大納言計謀、欲レ退二信左大臣一、共参二陣座一。時後太政大臣（＝基経）為二近衛中将兼参議一。良相大臣急召レ之、仰云、「応天門失火、左大臣所為也。急就レ第召レ之。」中将対云、「太政大臣知レ之歟。」良相大臣云、「太政大臣偏信二仏法一、必不レ知二行如レ此事一。」中将則知レ太政大臣不二預知一之由、報云、「事是非レ軽。不レ蒙二太政大臣処分一、難二専承行一。」送辞出到二職曹司一、令レ語二太政大臣一。大臣驚令二人奏一曰、「大臣是陛下之大功之臣也。…」

参議時代の藤原実頼が語ったこととして語られるこの記事は、右大臣良相の位置が『愚管抄』と大きく変っている。裏書のそれが善男とともに讒訴に加担し信の失脚を主導画策した姿を描くのに対し、『愚管抄』では善男の策謀を信じた帝の仰せを「疑ヒ思ハデ、ユヽシキ失錯」したとされているのである。良相の事件へのかかわりは『三代実録』源信薨伝にも次のように見えていて疑いがない。

八年春、（善男）欲レ遣二使園一守大臣家一。善男過二詣右大臣藤原朝臣良相一所行也。于レ時太政大臣不レ知レ有二此事一、及レ至二発

聞一愕然失レ色、即便奏聞、探ニ認事由。

藤氏寄りに偏った記事の散見する『三代実録』に相応しく策謀の主役は善男となっているが、良相の加担はこれによっても動かしがたい。『三代実録』貞観八年十二月八日条に基経従三位昇進任中納言の記事とあわせ良相の抗表、善男宅地資財没収記事が見えるのもこの間の経緯を寓わせて興味深い。しかし『愚管抄』は良相の失錯を語って策謀を語らない。それは『三代実録』が善男をこそ首謀者とし、事件出来の因縁を信と善男との旧来の敵対関係に求めて騙ろうとするのと軌を一にするものだろう。つまり『愚管抄』話は良相の加担を隠蔽しようとしているのである。

「蔵人頭」基経の登場はこの隠蔽にかかわる。基経が良房に信失脚の謀略を伝えた件は『大鏡』裏書にもあり、藤氏称揚に向けた隠蔽の作為者にとって善男の罪を暴くに功あった基経の働きは物語からはずせない。しかし良相の加担を隠蔽するとなると基経の情報入手経緯が問題となる。そこで「蔵人頭」。蔵人所は「掌ニ機密文書及諸訴ニ」(『標註職原抄』)。すなわち「蔵人頭」基経は、彼が善男の告訴とその謀略の情報を得る必然を用意する処置であったろう。

さてこのようにして『愚管抄』話の「蔵人頭」は登場する。これと同一人物をさすと見られる「頭中将」であってみれば、良房に事件を伝える「蔵人頭」は姿を見せないが、『宇治拾遺物語』話もまた良相の加担を隠蔽する物語に連なっていよう。冒頭部の良房と良相との関係を語る文脈が『愚管抄』のそれに類似していることもその傍証の一つとしてよいかもしれない。そして一方、『絵詞』は「頭中将」を語らない。これは『絵詞』詞書の表現内容が『宇治拾遺物語』話の表現内容と異なるものであったことを推測させる。

「頭中将」を語らない物語の冒頭がどのようなものであったかは明確にしがたい。しかしそれが、「頭中将」「蔵人頭」を必要としない物語であったことだけは確かだろう。「頭中将」「蔵人頭」を必要としない物語は基経の情報入手経緯を隠蔽しない物語である。とすれば『大鏡』裏書の実頼の語る物語は『絵詞』詞書の物語としていかにも相応しい。もちろん「大臣驚令ニ人奏ニ曰」として良房の人を介した諫言を語る裏書は『絵詞』画面と異なるから、『絵詞』詞書は裏書そのままではなかっただろう。しかし同じ良相の加担を伝える『三代実録』源信薨伝には「及レ至ニ発聞一愕然失レ色、即便奏聞、探ニ認事由。」とある。良相の策謀を語る物語に烏帽子直衣姿の良房が居てもそれはそれでかまわない。

*

『絵詞』冒頭の詞書の欠を『大鏡』裏書の物語で補って読めば、その〈絵語り〉はどうなるか。「後応天門有火。／良相右大臣伴大納言計謀、欲退信左大臣、共参陣座。」――これによれば炎を見つめる〈謎の人物〉は良相あるいは善男となる。基経への指示に首謀者の貌を見れば、ここは良相がよりふさわしかろう。一方、広廂に控える〈謎の人物〉は良相でも善男でもない。彼等が向かったのは「陣座」であって清涼殿ではない。では誰か。残念ながら裏書にはこれに関する記述がない。とすれば〈絵語り〉にこれを窺うほかはない。簾内の烏帽子・直衣姿が良房ならば残る上達部は源信か基経。信は前述のとおり画面構成上無理がある。ならば〈謎の人物〉は基経だ。良房に良相善男の謀略を伝え、良房に伴われて参内し簾外に控える景がこの画面なのだろう。そして基経は帝の赦しを伝えるために信の邸に向かう。詞書「赦し給ふ由、馬に乗りながらうち入り

たれば」、ここに使者の名が記されないのはこの部分の行為者が自明だったからにちがいない。とすればその名は既に広廂に控える人物において与えられていたはず、とは、あまりに空想がすぎようか。

『絵詞』の使者が基経であろうことは、しかし〈絵語り〉の具体から察しがつく。当該場面において、周知のとおり使者の姿は切り取られている。注意したいのは切り取られた部分の右、勅使につづく従者の姿で、そこには舎人と赤の水干姿の童が描かれている。このうち童に目を留めるならば、これと同様の童は『絵詞』の要所に配されていたのに気付く。

イ冒頭検非違使の次、参内を急ぐ公卿一行を描く場面。
ロ応天門炎上場面の次、会昌門前の一群中。
ハ当該箇所
ニ舎人の子と出納の子との喧嘩場面
ホ出納が舎人の子を蹴る場面
ヘ舎人真相暴露場面の末尾

ホヘは共に浅沓を履いた姿で他の人々と区別して描かれ、特にヘは「どこを目指してか一目散に駆けて行く。ご注進、ご注進。一大事出来、一大事出来。」(中央公論社『日本の絵巻』2脚注)といった態で、その左部分はハと同様に画面が切り取られている。表情などからみて全てを同一人物とするわけにはいかないが、少なくともハとホとヘを関係付けることはできるだろう。そしてその関係付けは、童の主人たる切り取られた人物の事件への関与を読み取らせる。つまり、使者は単に源信に無罪を伝える人物としてあったのではなく、善男追捕の情報提供など事件に深くかかわった人物として描かれていたのである。そのような人物は、良房に陰謀を伝え、諫言する良房の傍らに控えていた基経以外に考えにくい。ただしその基経は「頭中将」ではない。それは『宇治拾遺物語』話とは別の文脈にある、赤の下襲に束帯を着す「近衛中将兼参議」基経なのである。

*

こうしてみると、『絵詞』の〈絵語り〉はなかなか多弁である。策謀を企てる良相、陰謀を暴き信に赦しを伝え市井に犯人逮捕の情報を求める基経、烏帽子直衣姿で夜着姿の帝と面談し裁可の変更を迫る良房、陰謀に陥れられ天道に祈り危うく虎口を免れた源信、良相に同調し一人罪せられる伴大納言善男。これらの人物の姿から読み取り得ることは様々あろうが、さしあたり、政争のただなかにある良相・良房・基経とそれに巻き込まれて揺り返される源信・伴善男といった配置をそこに見ることはできるだろう。良相VS良房・基経の対立はすでに角田文衛「良房と伴善男―『応天門の変』をめぐって―」(『王朝の映像』七〇8)等に詳述されるところ。一方政争に巻き込まれる側は、『三代実録』源信薨伝が「大臣自後杜レ門、不二肯輒出一。欲レ開二遣裘情一、向二摂津国一。」と信自身の挫折感と政争への嫌悪を伝え、また『宝物集』(巻二)の事件評「我あやまつことなけれども怨憎のならひはかく侍るなり。」も信の受難を評している。善男のそれは臨終の言葉を「当二必今一度為二奉公之身一」と伝え有国として再誕したと語る伝承(『江談抄』)の内に見据えられていたとしてよい。すなわち、『絵詞』における人物の配置はこうした事件への解釈を背景にもったものと見ることができる。

政争のただなか、主導権をめぐって骨肉相食む争いを演じる良相・良房・基経、またそれに巻き込まれて揺り返される源信・伴善男。この布置は、『絵詞』に信西『長恨歌絵巻』のごとき諷喩性を窺う

とき、摂関期の政争や近くは保元・平治の乱のそれに重なってくる。そしてそこからは政治の主導権をめぐる争いとこれが招く嘆きとが表現内容として浮き彫りになってこよう。その目で見れば、『絵詞』が描く源信邸、伴善男邸の愁嘆の景は、状況の推移による両者の立場の逆転とともに、結局のところ嘆きを生きるほかない両者の運命を際立たせ、これを象徴的に表したものとも看取せよう。

『絵詞』末尾画面、八葉車の巻き上げられた簾の陰にある顔はいったい誰のものだったのだろう。伴善男、源信……。あるいはそれはこの絵巻を見るものの顔であったかもしれない。

（たけむら・しんじ／広島大学）